

同和問題（道徳）学習指導案

平成3年6月25日（火）第5校時

3年A組男子19名女子18名計37名

指導者 佐野富子

1 主題 人間としての生き方をもとめて

資料：ふるさと（私の願い）

2 主題設定の理由

3年生としてスタートして2ヶ月余り、生徒たちにもそして担任にもいよいよ3年になったという気負いがあり、毎日があわただしく過ぎるなか、生徒一人一人の心の思いをくみとったり、膝つきあわせて話し合う時間もつくることのできない現状がいまここにある。クラスの雰囲気は、全体的に活気に乏しく、何に対しても受け身で、自分の進路にたいしても、親や先生がどうにかしてくれるだろうと他人への依存の高さが少しめにつく。しかし、これは表面的なものであって子供たちの心は揺れ動いている。厳しい受験競争の中、1回のテストの結果に一喜一憂し、成績が悪い時、自分以下の存在を求め、心のやすらぎを覚えているこどももいる。そんな中、こどもたちにみんなでよくなる競争をしていこう。みんなで支えあい、みんなで伸びていこう。決して成績は良くなっていないのに席次で安心していく—そんな愚かな思いを捨て、競争の原理と連帯の原理をみんなで統一していこうではないかと訴えた。

そして、クラスには、昨年より引き続き担任することになったA子がいる。小学校三年生より登校拒否の傾向がみられ、二学年では欠席日数が100日をこえた。彼女の心の中のかっ藤は激しく、他人をよせつけず、外部世界と自分を遮断することにより、心のバランスを保とうとしている。昨年2名の長欠生をだした思いから、クラスというのは全員がそろい、はじめて成立すると確信する。彼女一人を欠き、そこに残り全員が、明るく心に残るクラスがたとえ存在しても本当の明るさではない。友の心の痛みを理解し、真の支えあう仲間集団でなくては、そこに明るさは存在しない。相手がふれられると傷つくであろうと自分に都合よく解釈することは、そのこと自体既に相手を低いもの、劣るものとして差別しているのだということがなかなか理解しきれていない。一人一人の問題を自分の問題としてとらえさせ、自分を語ることの喜びと連帯の喜びをクラスの中で実感させていきたいものである。

さて、昨年より同和問題学習に学年全体で取り組んでいくことができるようになった。多くの友の前で自分の思いを語り、考えることの苦しさを知った。その中から、同和問題学習を積極的に自分の問題として取り組む姿勢や差別解消

に向けての熱い思いがじょじょにはあるが、生まれつつある。大勢の支えあう仲間の一步の前進を確認しあうことの喜びを知ってきた。

対象地区生徒は自分の置かれた立場を自覚しながらも、もう一方では、逃げれるものなら、隠せるものなら隠したいと相反する思いの中でゆれている。「私は、毎月先生からもらう学習会の封筒がいやでたまりません。学習会も行っていないし、他の友達が見たら中身なんてきっとわからないだろうけど、つい机の中におしこんでしまいます。差別と真正面から向き合い、頑張る気持ちがあります。でも、気持ちとはうらはらなことをしてしまいます。」本校には、25パーセントの対象地域の生徒が在籍する。地区外の生徒は、「誰が地区の生徒であるか」を暗黙に了解している。それでも隠そうとする。それだけ胸はっていけない差別の厳しさがここにある。そして、同和教育への希いを学習していく中、丸岡さんと同じ被差別部落に生まれたB子が、弁論大会で胸はって自分のふるさとを名のった。B子は部落の友が涙を流し自分自身を語る姿にこんな思いをよせてきた。

「私も涙がジーンとこみあげてきた。でも、歯をくいしばってこらえた。私は、将来差別がこの世からなくなった時、友と肩を抱き合い喜びの涙を流したいと」かくすことから名のることへ自分を変革したB子、心の奥には差別解消にむけてともに自分の問題として捉えようとする友の支えがあった。翌日の「あゆみ」に「先生、私はみんなを信じます。」この短い文の中に教師である前に一人の人間としてより人間らしく生きる道を問われているように思う。

ある先生の話が心に重くのしかかる。

「同和問題学習の営みは、教師自身が、人間としてどのようにこの問題に関わって生きてきたか。自分自身の差別心を洗う中で、自分の生きざまを生徒一人一人にぶつけ、今どのようにして部落差別を解消しようとしているのかを語り、生徒自身の生き方を問い続けていく。」

誰のためでもない、自分自身のためにそして、生徒とともに学び歩んでいきたい。

そこで、本資料「ふるさと」を通し、ふるさとをかくさねば生きていくことのできなかった差別の厳しい実態を見つめ、部落差別が民主主義に反し、許すことのできぬ人権侵害であることを深く心に浸透させたい。そして、自分のおかれた苛酷な社会的立場から逃げることなく立ち上がり、自らを解放しようとした生き方に共感させ、同和問題と自分との関わりを心の底から語り合わせるとともに、作者の生き方を学ぶことにより人間としての生き方を追求させたいと願い、本主題を設定した。

3 ねらい

ふるさとをかくさねばならなかった理由とその心情を捉えさせ、自分自身の問題として同和問題の解決に立ち向かう意欲と態度を育てる。

4 視 点

人権と差別

5 指導計画

(1) 常時指導

自分の生活を語る（あゆみ・1分間スピーチ）

(2) 関連的指導

道徳「美しさを求めて生きる人生を」佐藤 文彦

人間としてよりすばらしい生き方とは何か、私達が求めていかなければならないことは何かを確認し、生徒一人一人の部落差別解消に取り組もうとする実践力を育てる。

(3) 核心的指導

道徳「同和教育への希い」……… 5時間

道徳「ふるさと」 …………… 1時間（本時）

(4) 発展としての関連指導

特活「自分の未来設計」

(5) 常時指導（発展）

日頃の生活の中で差別を見抜く力を養っていき、協力によって問題の解決を図ろうとする意欲や行動を育てる。

(6) 本時の指導

1) 目 標

作者のすばらしい生き方に共感させ、同和問題を自分のこととして受けとめ差別解消に立ち向かっていく態度を育てる。

2) 展 開

	学習活動	主な発問と期待する生徒の反応	指導上の留意点
導入	ふるさとをよみ 一人一人の思い を発表する。	○「同和教育の希い」を学習した あとでふるさとを読みどんなと ころが心に残ったか。 ・ふるさとをかくさねばいきてい けないということはつらいこと であると同時に自分の生き方も だめになってしまう ・ふるさは心のよりどころであ るはずなのに告白することによ	・できるだけ多 くの生徒に発言 させる。 ・人権侵害に関 わっている事柄 をみつけさす。

		って、迫害を覚悟しなければならないことに怒りをもつ。 ・ふるさとを名のれるような世の中をつくりたいという作者の思いに心がうたれた。	
展開	けもののような鋭さについて考える。	○ふるさとをかくすことことをけもののような鋭さで覚えたいうことについて考える ・誰に教えられたものでもない、知らず知らずに差別を肌で感じとっていた。 ・差別がひどくて、自分を守るために逃げていた。 ・生きていくための生活の知恵として覚えた。 ・それだけ差別が厳しかった。 ・世の中の冷たさが、そこにでている。	ふるさとを隠さねば生きていけなかった差別の厳しさに共感をもたせると共に何がこんな気持ちにさせたのかを考えさせる
	差別の実態について考える。	○どうしてふるさとを告げることができないのか。 ・生命をかけた行為だから。 ・就職から排除される。 ・愛する人との別れを覚悟しなければならない	いのちにかかわる重大な問題であることを痛感させる。
		○何が丸岡さんをかくすことからなのることへ変えたのか。 ・仲間の支えがあった。 ・差別される者に責任がないという真実を知った。 ・潤間先生との出会い。	本当のことを知ることによっていかに人間を強くしていくかに気付かせると共に、心から信頼しあえる仲間が人間を更に強くしていくかにつ

			いて気付かせる
		○胸張ってふるさとを名のらせた いという言葉への丸岡さんの願 いは何なのか ・差別に負けぬ強い心をもってほ しい。 ・この世から差別が無くなってほ しい。 ・差別を許さないという気持ち。	ふるさとを名の るということは 差別とたたかう ことであること をつかませる。
		○かくすことから名のることへ自 己変革した丸岡さんの生き方を どう思うか。 ・たった一人になっても、間違い についていけないという強い心 を持ちたい。 ・堂々と「ふるさと」の名がいえ る生き方をしていきたい。 ・部落差別解消に生命をかけたす ばらしい生き方をしたい。	丸岡さんの人間 としての生き方 に共感させると ともに、部落差 別と闘う意欲を もたせる。
発展	学んだことをも とにして今後の 課題について確 かめ合う	○自分にとって同和問題は何か、 どう生きたいのか。 ・醜く汚い差別を身近な所から無 くしていきたい。 ・差別から逃げてはいけない。自 分から立ち向かっていきたい。 ・同情や憐れみでなく、人を尊敬 する心を持ちたい。人を尊敬す る心は、この世の中から醜さを なくす強い生き方につながると 思う。	作者の生き方か ら自分の生き方 を考えさせる。